

隠れた魅力!

いまぼく博士の

今治探求ガイド

イラストMAP付き
vol.2

意外な歴史!

感動のスポット!

今治をもっと知ることができるガイドブック

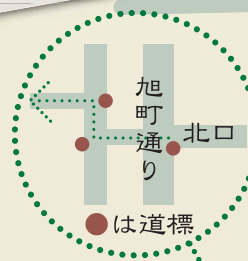
広域マップ



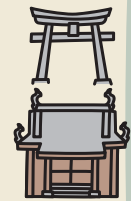
かつて銅の製錬所で栄え、
現在は多数の近代化遺産
が残っている
(住友金属鉱山(株)の管理)

観光に関するお問い合わせ
今治市役所観光課
☎0898-36-1541
今治地方観光情報センター
☎0898-36-1118
公益社団法人
今治地方観光協会
☎0898-22-0909

いまばり探求 桜井 さくらい



国分山
城下町の名残
(短冊状地割)



①古天神
(道真伝説)

梅林

④小谷屋
漆器店

銀行



今治街道

旭町通り

北口

松林

戸倉屋漆器店



月原漆器店



東口

グラウンド

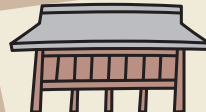
⑤肥前
灯ろう



②新天神
(道真伝説)



月賦販売
発祥碑



絵馬堂

保育園



西口

⑥石造
灯明台

コンビニ

海防に備えて、松山藩が
安政2(1855)年に築造



お台場(土塁)

③志島ヶ原

松林

南口

梅林

WC

道真が
お礼に贈った
神像を祀る



素波神社
(道真伝説)

※観梅会の
時季のみ

梅林

文化15(1818)年に
紀州黒江の梶折敷間屋が
寄進したもの

黒江
灯ろう



道真が濡れた衣を
乾かしたという



衣干岩
(道真伝説)

桜井河口港

内港波止
(古い石積み)



梶船が寄港した内港と漆器倉庫
(昭和13年/近藤福太郎撮影)

江戸時代後期頃から、桜井商人は紀州黒江の漆器を大量に仕入れ、西国方面へ廻船行商を行うことで躍進。やがて桜井でも漆器製造を始めるものが現れ(天保年間頃)、明治後期～大正期頃に最盛期を迎えます。その頃に、桜井商人が中心となって、漆器・呉服・家具などを取り扱う月賦販売を始め全国に広めています。

江戸時代に桜井地域を支配したのは今治藩(古国分・国分)と松山藩(桜井・長沢・孫兵衛作・旦・登畑・宮ヶ崎)で、藩主はともに久松松平家で菅原道真を先祖とします。松山領は明和2(1765)年に天領となり(後、松山藩預り地)、当地域の年貢米は桜井港から別子銅山に回漕されています。



① 古天神 (古国分の綱敷天満神社) ※桜井1丁目/天神原
桜井地域には、菅原道真が太宰府へ左遷される際に、時化で避難した伝説が残る。住民が船具の綱を敷物代わりにもてなしたことが、社名の由来となっている。祭神は菅原道真。



② 新天神 (桜井の綱敷天満神社) ※志島ヶ原の一画
江戸時代中期に、今治藩領の綱敷天満神社で不祥事が起こり、しばらく祭礼が中止となったため、松山藩領の人々が新たに勧請。今治領の古天神に対し、松山領は新天神と呼ぶ。



③ 志島ヶ原 ※33,000坪
燧灘に臨む白砂青松の海岸で、アカマツ・クロマツ約2,500本と紅白の梅約500本があり、国指定名勝となっている。また、敷地内に新天神・お台場・衣干岩などの名所旧跡もある。



④ 小谷屋漆器店 ※桜井4丁目/栄町
幕末期頃から梶舟行商を行っていた桜井有数の漆器問屋で、梶舟の船旗・航海日誌を所蔵。店舗は明治期竣工の木造つ二階建てで、大正期竣工の木造三階建て離れも現存する。



⑤ 肥前灯ろう (1対)
※新天神の社殿前
綱敷天満宮950年祭を記念して、嘉永5(1852)年に肥前伊万里の陶器屋仲間が寄進したもので、高さ約4.4m。桜井商人は、黒江漆器と伊万里陶器を梶舟行商で多く売りさばいた。

肥前伊万里は、現在の佐賀県伊万里市。
紀黒江は、現在の和歌山県海南市。



⑥ 石造灯明台
※新天神の西口付近
今治藩の廻船御用商人・柳瀬義富が幕末期頃に寄進した石造灯明台(花崗岩製)で、高さ約5.8m。新天神は松山藩領であったが、玉垣等の寄進者は今治商人も多く確認できる。

新天神社殿横の絵馬掛けの玉垣には、寄進者である船主の船名が多く刻まれる。



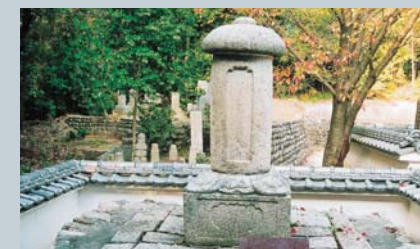
唐子浜 ※古国分
燧灘に臨む白砂青松の海岸で、海浜植物のハマゴウ群落やこれを食草とするヤマトマダラバタが確認できる。この沖合約230mに、来島海峡から移築保存された赤灯台がある。



唐子浜の赤灯台 (旧、コノ瀬灯標) ※古国分
明治35(1902)年4月1日に来島海峡のコノ瀬暗礁で初点灯。昭和53(1978)年3月に業務を終え、同年10月に移築保存されてモニュメントとなった(赤色円形石造)。



今治藩主の墓 ※古国分 県道38号線沿い
今治藩主・久松松平家の霊廟で、県指定史跡。今治で没した初代定房・3代定陳・4代定基の宝篋印塔3基(高さ3.6m)と大小の石灯籠67基が現存する。梅鉢紋が同家の家紋。



脇屋義助の墓 ※国分 国分寺の東約400m
新田義貞の弟・脇屋義助の霊廟で、江戸時代に整備された。義助は、興国3(1342)年に中・四国の南朝勢力巻き返しを担って今治(伊予府中)へ赴任するも、間もなく病没。



国分山城跡 (唐子山) 標高は約105m
福島正則が伊予領有時代(1587~95)に織豊系城郭として整備か。麓の耕地や市街地に城下町の地名や短冊状地割が残っている。最後の城主は小川祐忠で、関ヶ原合戦後に廃城。



伊予国分寺塔跡 ※国分 国分寺の東約100m
伊予国分寺は、奈良時代の8世紀半ばに建立された。現存するのは塔跡の礎石と基壇のみで、国指定史跡。JR伊予桜井駅の近くにも古代寺院の礎石が残る(伝、伊予国分尼寺塔跡)。

波止浜湾

水門

波止浜湾

(水門より内側は)
干潮時に
干潟となる



昭和初年頃の波止浜湾(絵葉書より)

は、かつて塩田だったところ

渡し場 (来島・小島・馬島行き)

波止浜港

WC

⑥石造 灯明台

— 造船所
(太平洋戦争末期に
竣工した石垣ドライ
ドックが現存)

仲之町通り

井戸

原家屋敷跡
(土蔵が残る)

かつて塩田地主で
印刷会社を創業

かつて塩田地主

西本家

④矢野本家

蓬萊町通り

服部家
(旧牧野家)

波方有数の
船主住宅を移築

海中鳥居

WC

銀行

夕止明神●

自動車
教習所

●波止浜公民館

⑤ 波止浜小

国鉄波止浜駅の
開業に合わせて
大正末期に整備

八木亀三郎の肖像写真
(波止浜公民館所蔵)

スクラッチタイル

今井家
(タオル会社を創業)

移設された
明治42年竣工の
石造アーチ橋

駐在所



神明橋

①龍神社

銀行

波止浜公園
(高浜虚子の句碑あり)



① 龍神社 ※塩竈神社の社号額は巖谷一六の揮ごう塩田と港町の繁栄を願って、近江勢田の八大龍王を勧請する。境内には塩竈神社や神明橋もあり、ウバメガシが生い茂る。幕末期の波止浜祭礼を描いた絵馬が拝殿に掲げられている。



② 波止浜塩田跡 ※塩田は昭和34(1959)年に廃止天和3(1683)年、安芸竹原の製塩技術を導入することで誕生した、伊予国最初の本格的な入浜式塩田。その後も増築を重ね、明治初年には42軒・約63haの規模を誇った。



③ 八木亀三郎家旧宅 (屋号は升屋。升八木家ともいう) 大正初期に竣工した、波止浜を代表する実業家・八木亀三郎(1863~1938)の店舗・住宅。大正時代に愛媛県一の高額納税者で、今治商業銀行頭取を務め、蟹工船の船主でもあった。



④ 矢野本家 (屋号は濱田屋) 明治初期竣工か波止浜一の塩田地主の住宅で、明治・大正期は愛媛を代表する資産家であった。矢野通保は、今治出身の日本画家・大智勝観のパトロンで知られ、教育・文化振興にも造詣があった。



⑤ 丹波屋八木家 (丹八木家ともいう) 明治20年頃竣工波止浜有数の塩田地主(塩問屋)住宅で、八木光三郎は明治初期に醤油の醸造業を始め、同35(1902)年に愛媛最初の本格的洋式造船所となる波止浜船渠(株)の発起人代表を務めた。



⑥ 石造灯明台 ※かつて側に塩専売庁舎があった航海安全を祈願し、嘉永2(1849)年に築造された。花崗岩製で、高さは約6m。塩田開発後、波止浜は松山藩有数の港町として発展し、塩買船や燃料の薪・石炭船で賑わった。

龍神社の祭礼絵馬にも描かれ、明治35年に八木亀三郎らによって現在地に移築される。



来島城跡(石垣・岩礁ピットなどの遺構が残る)



石垣跡
(自然石の野面積みで裏込め石あり)



村上通康(画像/安楽寺所蔵)
※通康の孫・康親は豊後森藩主となる



繫船用の岩礁柱穴跡
(干潮時に見えます)

来島海峡航路沿いにある周囲3kmの島で、ロシア・バルチック艦隊の瀬戸内海侵入に備えて島内3ヶ所に砲台・堡壘が築かれました(明治35年竣工)。中部堡壘の28cm榴弾砲6門のうち2門が移設され、203高地攻略に使用されたようです。大正末期に要塞は廃止され、昭和2(1927)年に波止浜町の公園となりました。



芸予要塞(小島砲台)跡



北部砲台跡
(昭和初年の絵葉書より)



弾薬庫跡
(床下アーチの構造は、防湿目的)



中部堡壘跡
(榴弾砲の砲座跡が残り、頂上の観測所跡からの眺めは最高)

いまばり探求 大浜 おおはま

来島海峡に臨む大浜地区は、海峡航路の地の利に影響を受けた、海のロマンあふれる歴史遺産が数多く残されます。

海峡大橋を間近にひかえ、海峡航路を通航する多種多様な船舶や川のように流れる潮流を身近に感じることができます。

戦国時代末期、来島海賊衆の拠点の一つ。当時、大浜は来島村上氏の城下町だった。

突堤

小湊城跡

城慶寺

湊漁港



1号墳

県病院

大浜潮流
信号所

②相の谷古墳

2号墳

1号墳に隣接。
前方後円墳(全長53m)
古墳時代前期か

近見小

①

来島海峡
海上交通センター
(来島マーチス)

コンビニ

湊石風呂跡
海鮮料理
伊豫水軍

海岸道路は狭い

秋祭りに
權伝馬あり

大浜漁港



参道入口に
鳥居あり



池

③大浜八幡神社



系山方面

系山方面

今治北 IC

G.S

来島海峡
S.A.

近見山

波止浜



①来島海峡海上 交通センター

(通称名/来島マーチス)

来島海峡は1日平均約600隻の通航船舶がある海上交通の要所で、潮流の向きで6時間ごとに航路が変わる世界で唯一の変則航法もあり、この施設で航行安全の管制業務を行っている。

「海の日」に施設内部が一般公開され、管制塔の塔頂体験も行っている。



相の谷1号墳

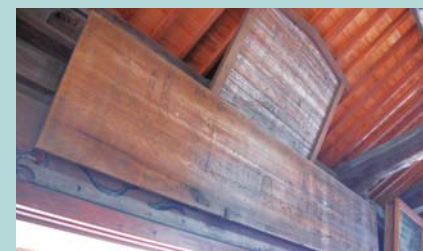
②相の谷古墳 ※今後の学術調査に期待!

1号墳は古墳時代前期・4世紀の前方後円墳で、全長81mは愛媛県下最大。標高60mに立地。竪穴式石槨(せっかく)からタ龍鏡(タリョウキョウ)(獣紋鏡)が出土し、埴輪・壺の破片も多く採取されている。



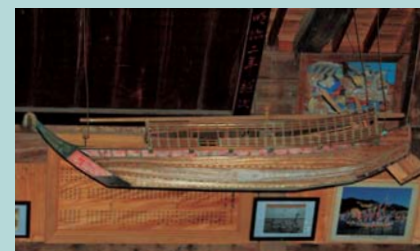
③大浜八幡神社

主祭神の乎致命(オチノミコト)は、今治を代表する古代豪族・越智氏の祖とされる。江戸時代は今治藩第一の神社として、城下の武士・町人の信仰も厚く、奉納物が豊富である。



③今治藩主の御座船板図 ※拝殿の中

天保11(1840)年5月に竣工した今治藩主御座船・大寿丸の設計図面。水押しに藩主の家紋・梅鉢紋がある。357×71(cm)。愛媛県内に現存する藩主御座船の板図としては唯一。



③御用商人寄進の船模型 ※拝殿の中

今治藩御用商人の柳瀬・黒部・深見らが、海上安全を祈願して慶応3(1867)年に寄進。精巧につくられたミニチュア模型で、構造は舟才船(ふさいせん)ではなく御座船である点が興味深い。



③沖冠岳らの奉納絵馬 ※拝殿の中

今治出身の沖冠岳(1817~76)は、谷文晁ら江戸南画家の画人と交流し、江戸にて伊勢神戸藩のお抱え絵師であった。郷土で活躍した絵師山本雲溪(うんけい)の大絵馬も飾られている。

Ⓟ

Ⓟ

系山展望台

系山トンネル

砂浜

Ⓟ

河津桜



6

4

4

7

塩崎素月 句碑

しまなみ海道周辺を守り育てる会 2015作成

乃万地域には、大型で意匠性に優れた鎌倉時代後期～南北朝期の五輪塔・宝篋印塔・宝塔が数多く残されています。このうち16基が国の重要文化財（以下、国重文）指定を受け、中世石造物の宝庫です。

造立の背景には、当時の今治が伊予国府（府中）で、海上交通の地の利を得た港湾都市であったことや、石塔造立を得意とする西大寺流律宗の布教活動や凝然の存在などが考えられます。

田園風景の中をゆく
“乃万の石塔めぐり”は、
サイクリングコースに最適です

196



BEMAC

日本最小の
在来馬に会えるよ！

(P)

WC

野間馬
ハイランド

坂道

野間
集会所

(P)

野間健康広場

馬場五輪塔

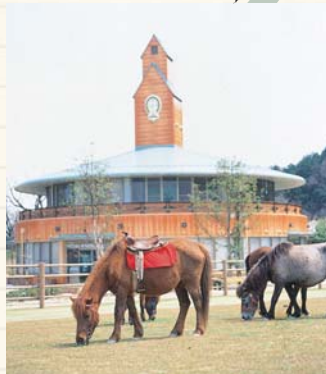
2

池

普通車は
Uターン
できません

3

長円寺跡
宝篋印塔



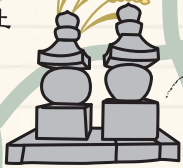
野間馬ハイランド
(入場料無料)

境内に中世石塔残欠が
集められている

野間寺
跡

(P)

日吉神社
井



1 覚庵五輪塔

大型塔でありながら、
なぜか123は種子
(梵字)を刻まない



乗禅寺石塔群 (すべて国重文) ※延喜

鎌倉後期～南北朝期に造立された11基の石塔群（五輪塔4基・宝篋印塔5基・宝塔2基）が1ヶ所に整備されている。3基に紀年銘が刻まれ、宝塔基礎の円形反花座には地方色が見られる。



凝然 (1240～1321)

※画像は東大寺所蔵

鎌倉時代に、旧仏教の復興に尽力した今治出身の宗教家で、『八宗綱要』の著者や華嚴宗中興の祖で知られる。東大寺戒壇院主や唐招提寺管長を務め、朝廷から国師号を賜るほどの高僧であった。

※『八宗綱要』は、奈良仏教の南都六宗と平安二宗の天台・真言宗を学ぶ教義書。



1 覚庵五輪塔 (ともに国重文) ※野間

銘文は刻まれないが、鎌倉後期の造立と考えられる。高さは2基ともに2mを越え、石材は花崗岩。田圃の中に立地し、地元では戦国武将の夫婦墓として祀られている。基壇は三段の切石造り。



2 馬場五輪塔
(国重文) ※野間

地輪側面に銘文が刻まれ、嘉暦元(1326)年に紀氏娘の供養塔として建立されたことが分かる。その紀氏とは、当時の伊予国府の在庁官人クラス的人物と考えられる。高さ2.5m。1と違い、基壇が線型座。

平成元年に解体修理をした際、銘文内容と一致する25歳前後の女性人骨と木製五輪塔が見つかった。



3 長円寺跡
宝篋印塔 (国重文)

※野間

塔身背面に銘文が刻まれ、正亨2(1325)年に弥勒菩薩信仰に基づき建立されたことが分かる。高さ3.6mの大きさで、基礎と塔身の間に受け座を有する“越智式”の意匠で有名。隅飾りは別石。

尾道の浄土寺や大三島の大山祇神社にも越智式が現存。同様式は、しまなみ海道地域の地方色といえます。



野間神社
宝篋印塔 (国重文)

※神宮

塔身に銘文が刻まれ、元亨2(1322)年に紀氏らが除病延命を願って建立したことが分かる。高さ2.8mの大きさで、相輪は後補。3の石塔同様に“越智式”の宝篋印塔で有名。

同神社の春の例大祭は見応えがあり、獅子舞・継獅子など乃万地域の各種伝統芸能が披露されます。



朝倉 Asakura



① 七間塚古墳 (県指定史跡)
直径20m前後の円墳で、横穴式石室の全長は10m。



② 五間塚古墳 (市指定史跡)
王塚とも呼ばれる円墳で、横穴式石室の全長は9m。

野々瀬地区以外にも、朝倉地域には古谷地区の多伎神社境内などに円墳の群集墳が現存しています。朝倉地域から出土した考古資料は、朝倉ふるさと美術古墳館で見学できます。

※朝倉ふるさと美術古墳館 (月曜休) 0898-56-3754



樹之本古墳 (市指定史跡)
周越道路沿いにある古墳時代中期(5世紀頃)の円墳で、希少価値の高い青銅鏡(細線式獣帯鏡)や埴輪・陶質土器などが出土している。※青銅鏡は東京国立博物館所蔵

笠松山麓の野々瀬地区には、古墳時代後期～終末期(6～7世紀頃)の円墳20基余りが現存しています(野々瀬古墳群)。

また、笠松山(標高328m)は、尾根でつながる世田山(標高339m)とともに、南北朝合戦の古戦場・世田山城跡で知られ、『太平記』巻22には“世田ノ城”で登場し、南朝の将・大館氏明の戦死と篠塚伊賀守の逃亡が知られています。



国道196号線沿いにある藤山健康文化公園は、芝生の多目的グラウンドや充実した遊具で、休日は親子連れで賑わう人気スポットです。春は池のほとりで花見も楽しめます。

この公園の展望台(標高80m)となっているのが妙見山古墳(1号墳)で、斎灘と大西平野が一望できます。学術成果を活かした復元整備が評価され、遺跡としては初のグッドデザイン賞(平成9年度)を受賞しています。



① 妙見山古墳 (国指定史跡)
堅穴式石槨は見学可・月曜休み(10:00～10:30、15:00～15:30)
古墳時代初期・3世紀後半の前方後円墳とされ、全長55m。出土品には、畿内系の二重口縁壺や九州とのつながりが考えられる破砕された斜縁四獣鏡があり、伊予型特殊器台は弥生後期の松山平野を中心とする西瀬戸内系器台の影響が見られる。



② 住村博士胸像
大西町出身の外航船長。昭和45(1970)年2月に大型鉱石運搬船「かりふおるにあ丸」(全長218m・34,001総トン)に乗船して房総半島沖を航行中、異常な大波に襲われ沈没。乗組員の救助を優先して、自らは船と運命とともにした(44歳)。その大波のメカニズムは、海洋物理学の世界で今も解明中。



菊間

Kikuma



① 荒神社の瓦製灯ろう
天保2(1831)年に瓦業者が寄進した灯ろう。火袋の透かしに「金」の文字があることから、金毘羅灯ろうと分かった。かつて、この麓の海岸は船ヶ浦と呼ばれ、瓦が船積みされた。江戸時代の瓦製灯ろうは、近くの金刀比羅神社とかかわら館にも現存する。



② かかわら館の展示品など
明治17～19年の皇居御造営瓦で使用された鬼瓦の木型。当時の請負業者宅に現存し、軒丸瓦のサンプルについてはかわら館に展示。同館には近世・近代の鬼瓦、瓦職人・木型職人の作業道具、広島で被爆した菊間瓦なども展示されている。

いぶし瓦の産地・菊間の身近なルーツは、江戸時代に松山藩が設けた製瓦業者の株仲間、26軒株、にさかのぼります。領内53株のうち、半数の26株が菊間の浜村にありました。
飛躍のルーツは、明治16(1883)年に宮内省から御下命をうけた「皇居御造営瓦」の請負で、見本に送った瓦で特選の栄誉を受けたのが三州・泉州・菊間の三産地でした。これを機に、同業者の組合が結成されて産地の声価が高まりました。

※かわら館(月曜休) 0898-54-5755

波方

Namikata

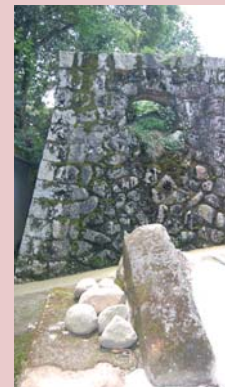


① 赤煉瓦灯明台
波方船主が、玉生八幡神社境内の金刀比羅宮に捧げた灯明台。高さ約5m。明治後期頃の築造か。昭和4年の海図には「Lt.F」(ライトハウス・不動光)と記される。もとは海岸の砂浜に建ち、平成17年の県道拡幅工事で現在地へ約10m移動。



② 船主寄進の玉垣 ※神社石段
大正初期に波方船主が寄進した玉垣で、船名と船主名を刻んでいるのが特徴。当時、石炭船を所有した③瀬野熊吉・④浅海辰次の旧家塀には、花崗岩や煉瓦をあしらった石塀が現存する。神社の拝殿には、明治43年寄進の船模型がある。

「海運のまち・波方」の身近なルーツは、明治30(1897)年発足の波方廻船組合にさかのぼります(現、波方船舶協同組合)。塩田用石炭の回漕で、石炭産地(北九州・宇部など)と瀬戸内海の塩田産地を往来するなかで発展していきます。また、菊間瓦焼成後に残る松葉の灰を、煉炭工場のある阪神方面へ回漕するスバイ船主たちもいました。波方港界限には、彼らの近代の繁栄・結束を物語る海事遺産が見られます。



なが 谷に
① 長谷発電所

水槽・鉄管路跡

※三島神社境内

今治電気(株)が明治40(1907)年11月に竣工させた今治地方最初の水力発電所。最大出力180kw、有効落差約18m。鈍川発電所の誕生で廃止となる。蒼社川沿いの長谷地区三島神社境内に、水槽などの遺構が見られる。



②長谷発電所 取水堰跡

明治40年、蒼社川と玉川(木地川)の合流地点に築かれた。水圧に耐えるため、石垣とセメントを使用。ここで取り込んだ水が、左岸の水路を伝って約1.5km下流の発電所本館へ送られた。



③落合橋

昭和12(1937)年8月竣工。蒼社川に架かる鉄筋コンクリート造りの開腹アーチ橋で、鬼原地区と長谷地区を結ぶ。橋長27.5m、幅員2.8m。左岸の橋脚は、長谷発電所の水路遺構に建つ。これより200mほど上流が玉川との合流地点(落合)で、ここに②がある。



④ 鈍川発電所
本館

愛媛水力電気(株)(阿部光之助 社長)が大正9(1920)年6月に竣工させた水力発電所。最大出力800kw(当初は515kw)。有効落差138m。現在の水車・発電機は昭和29年の設置で、四国電力(株)が管轄。かつては職員が常駐したが、現在は遠隔制御で管理。



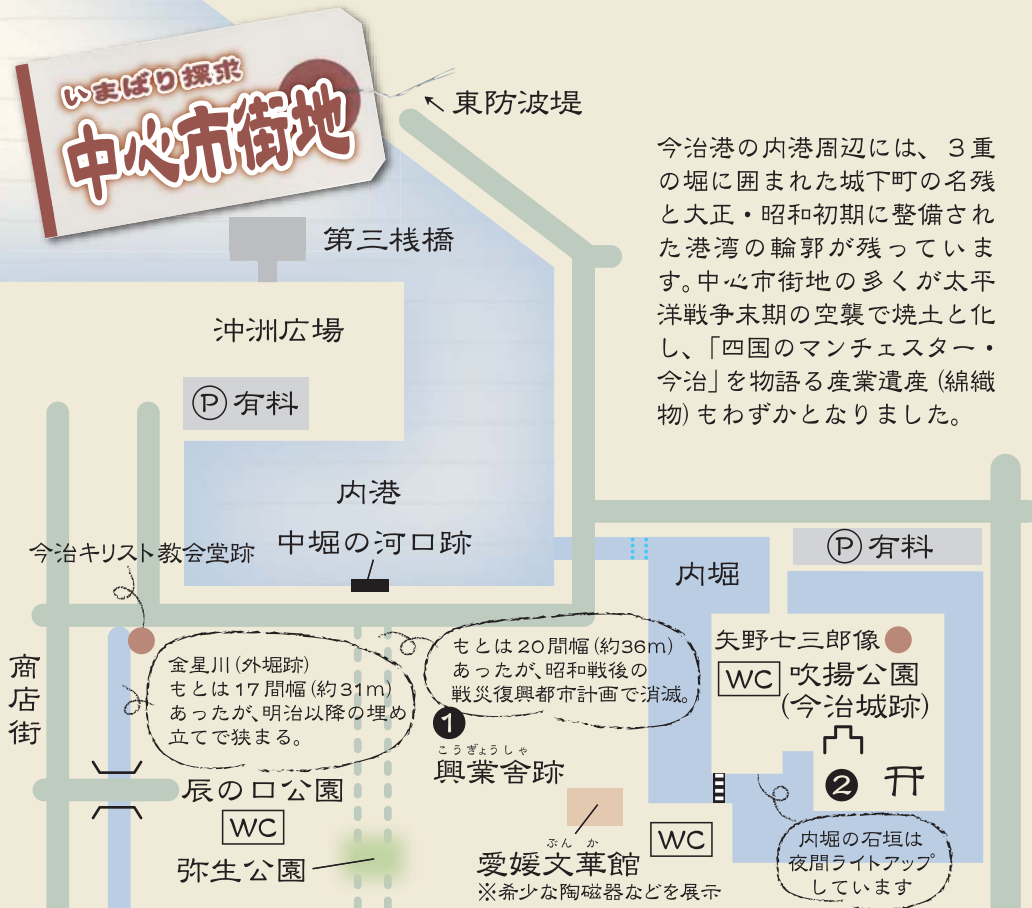
⑤ 鈍川発電所 取水堰

森林館より少し上流の木地川(釣堀手前)に設置されている。ここから約1.5kmの水路・隧道を伝って、本館上の水槽へと至る。水路などの土木施工は、東京の川北組が請け負った。



⑥ 鈍川溫泉鄉

身近なルーツは、明治初年に旧今治藩主・久松定法が「楠窪冷泉浴場」を整備したのが始まり。その後、鈍川村の有志が温泉組合をつくり、大正14(1925)年9月18日に鈍川温泉が開場する。



内港周辺



① 株興業舎第一工場跡 (通町)

四国屈指の綿織物会社・興業舎があった場所で、同社は矢野七三郎の遺志を継ぐ柳瀬一族によって成長を遂げた(主力は綿ネル・広幅織物)。建屋の壁だけが残る(明治後期竣工か)。



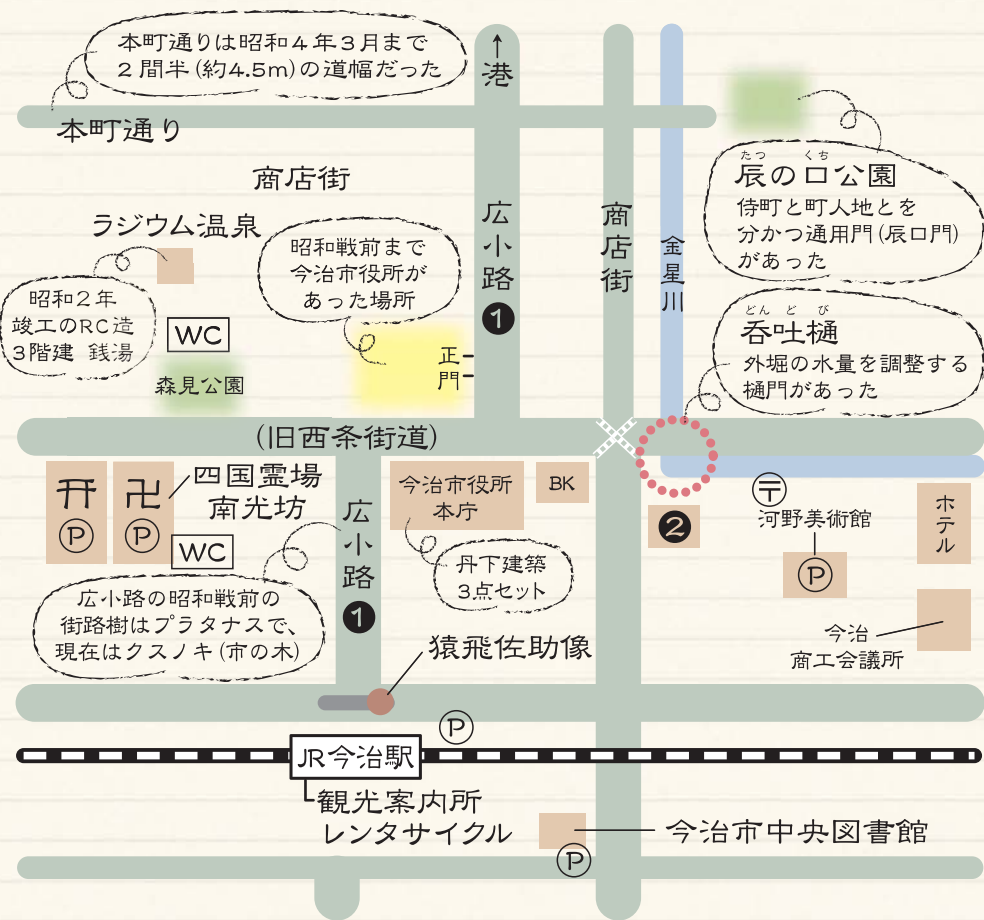
② 開市記念 時報塔 (本丸跡西隅櫓台)

大正9年の今治市制施行を記念してつくられた。サイレンで市民に時間を伝え、太平洋戦争中は空襲警報にもなり、昭和30年代に廃止。台座の高さ4m余りで、外装はモルタル。



築港完成当時の今治港(昭和9年)
※写真/今治市所蔵

今治港の築港整備は大正9(1920)年から昭和9(1934)年にかけて実施され、長く伸びる東防波堤や内港の輪郭はこの時に出来上がります。これにより、藩政時代の港の景観は一変します。



広小路周辺



① 昭和初年の駅前広小路
※絵葉書より

今治駅の開業に合わせ、広小路は当時の市庁舎正門前まで整備された。港まで伸びるのは昭和4年3月のこと。当時の道幅は10間(約18m)で、昭和戦後に20間幅(約36m)に拡張された。



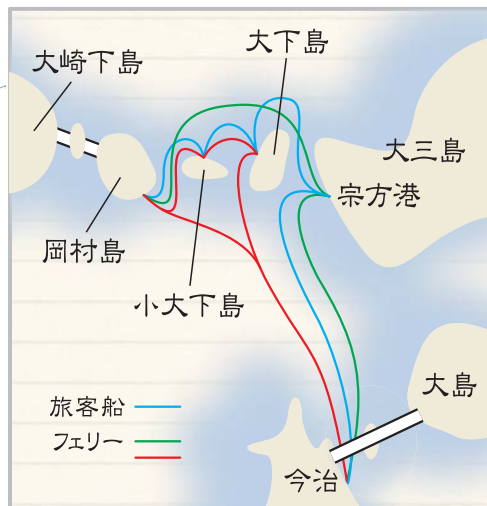
② 愛媛信用金庫今治支店 (1960年竣工)

これ以外にも、現存する今治市役所本庁舎・公会堂(1958年)、市民会館(1965年)や今治商工会議所(1985年)などが、今治出身の建築家・丹下健三(1913~2005年)の設計による。

今治の広小路は、国鉄今治駅の開業(大正13年2月)が契機となって、駅と港を結ぶ近代の目抜き通りとして整備されます。一方、それ以前の目抜き通りは本町通りで、城下町の町割りには海岸線と平行でした。この双方の都市軸の交差点が、市庁舎前ロータリーです。昭和戦後は、ここを都心に位置づけたまちづくりを行い、港町・今治は発展します。

いまばり探求 関前 せきぜん

とびしま海道としまなみ海道の交差点「関前地域」は、岡村島・小大下島・大下島の3つの有人島からなります。今回は、かつて石灰石の採掘で賑わった小大下島の産業遺産に光を当てたいと思います。



①カネ源水源地 ※海底送水管で岡村島へ送る
石灰岩の採石場跡にできた水源地で、名称は鉦山経営者の屋号。同鉦山は小大下鉦山と呼ばれ、昭和7年に大阪窯業セメント(株)が機械設備を導入後に採掘量が増えるも、同48年に閉山。



②石灰石貯蔵タンク ※高さ約15m
本村上鉦山の岸壁に設置された石灰石貯蔵タンク(2,300t収納)。昭和9年に日東セメント(株)が設置するも、同16年に同鉦山は浅野セメント(株)の傘下となる。昭和52年に閉山。



③山神社 ※水桶を両肩に担ぐ、高下駄を履いた石灰職人
石灰鉦山の繁栄を願い、大山積神を祀る。拝殿の梁には、石灰製造を行う職人の姿がかたどられている。石鳥居は、大正5年に大阪窯業(株)の現地支配人が寄進したもの。

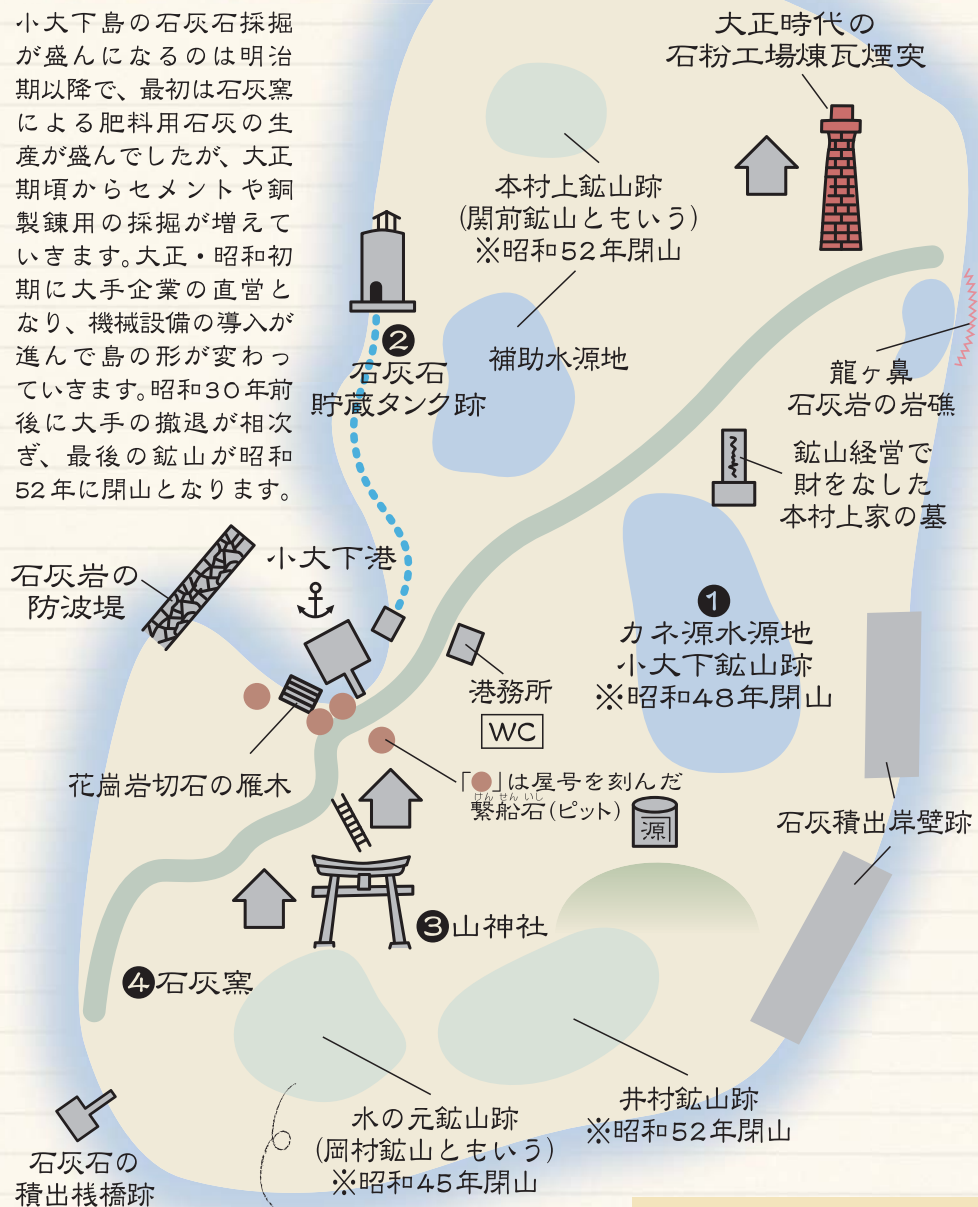


④石灰窯 ※幅約10m、高さ約5m
肥料用石灰を焼成するための窯で、焚き口は2つあり、内部は徳利状の耐火煉瓦構造をしている。大正～昭和初期の築造か。こうした窯跡が、島内にはまだ数基残っている。

こおげ 小大下島

★島の大きさ…周囲約3.4km
面積約0.9km²

小大下島の石灰石採掘が盛んになるのは明治期以降で、最初は石灰窯による肥料用石灰の生産が盛んでしたが、大正期頃からセメントや銅製錬用の採掘が増えていきます。大正・昭和初期に大手企業の直営となり、機械設備の導入が進んで島の形が変わっていきます。昭和30年前後に大手の撤退が相次ぎ、最後の鉦山が昭和52年に閉山となります。



大正6年に住友別子鉦業所の直営となり、採れた石灰石は四阪島製錬所へ送られた

関前情報

ホームページ「きないや せきぜん」
<http://sekizenweb.com/>

① 高浜虚子

明治7(1874)年生
昭和34(1959)年没

松山市出身の俳人・小説家で、正岡子規の愛弟子の一人。柳原極堂が創刊した俳誌『ホトトギス』を継承し、夏目漱石の小説『吾輩は猫である』『坊っちゃん』を同誌に連載して話題をよんだ。子規没後は客観的に描く写生手法を守り、俳句の普及に努め、昭和29(1954)年に俳人として初めて文化勲章を受章した。

戻り来て 瀬戸の夏海 繪の如し

この句は、昭和11(1936)年6月11日午前、ヨーロッパの外遊(2～6月)から帰国途中、松山市沖へ来島海峡の海域で旅客船「箱根丸」の船上から詠んだもの。外遊のうち約80日間は船上生活で、ヨーロッパでは次男・池内友次郎(作曲家)のバリの下宿に滞在し、ベルギー・ドイツ・オランダ・イギリスなどを訪ねている。詳細は、虚子著『渡仏日記』(改造社/1936)に記され、句碑の銘文はこれより抜粋。

③ 塩崎素月

明治16(1883)年生
昭和21(1946)年没

愛媛県西予市城川町出身。学生時代に、村上霽月から俳句の指導を受ける。23歳で文芸誌『四国文学』の編集を任され、高浜虚子や柳原極堂などと交友。昭和2(1927)年に松山市で開催された第一回全国俳句大会を主宰した。晩年は波止浜湾小浦に移住して電照真珠養殖に励み、その間に波止浜公園で虚子を招いた俳句大会を開いている(昭和15年)。

一方、妻の波留女も昭和4年に松山で婦人俳句会「二葉会」を主宰するなど、愛媛を代表するホトトギス系女流俳人であった。

春潮や 十歩るかはる 島のさ満

素月

この句碑(大島石)は、平成26(2014)年11月に地元有志らによって建立された。小浦に移住後の句であろう。

渡佛日記の一節

昭和十一年六月十一日(木曜)

朝六時床を出て甲板に出て見ると丁度郷里の海岸を通つて居るらしい島山のため、ずまひであった(中略)そこへ同郷人の瀬川君も起きて来て互に指し示しつ、語つたかねて私の郷里の山川に接したいと云つて居つた楠窓君も呼んで共に見た今更ながら瀬戸内海の景色の和らく繪のやうなに見入つた

戻り来て

瀬戸の夏海

繪の如し

来島の瀬戸に来るまで甲板に佇んで居て少し朝飯が遅れた

高浜虚子

この碑(花崗岩)は、もともと国鉄今治駅前にあった。戦災で焼失した駅の復興を記念し、昭和26(1951)年6月に有志が建立。しかし、駅前広場の改装によって同47年2月に糸山へ移された。

波止浜公園にも、昭和25年に建立された虚子の句碑「春潮や倭寇の子孫汝と我」があり、虚子は実際に何度か波止浜

④ 野口雨情

明治15(1882)年生
昭和20(1945)年没

茨城県出身の詩人。大正時代末期から昭和初期にかけて、民謡詩人として人気を博し、童謡界の三大詩人の一人とも称された。主に作曲家の中山晋平と組み、生涯で二百余点の童謡・民謡・校歌の詩を残す。代表作に「赤い靴」(作曲/本居長世)、「シャボン玉」(作曲/中山晋平)、「七つの子」(作曲/本居長世)などがある。

くるい沙なりや 来島瀬戸の

汐もぜひなや 渦もまく

この歌碑は、昭和4(1929)年に今治へ来遊した際の詩の一節で、中山晋平が作曲し、民謡「今治音頭」となった。昭和41(1966)年10月に、波方町出身の郷土史家・森光繁が自費で建立し、当初は糸山展望台付近にあった。また、歌人の吉井勇も昭和11年に糸山沖の小島を歌行脚している。

の地を訪れている。姪で俳人の今井つる女は、波止浜町長・今井五郎の妻であった。

② 柳原極堂

慶応3(1867)年生
昭和32(1957)年没

松山市出身の俳人・新聞記者で、正岡子規とは少年時代からの友人。明治30(1897)年創刊の俳誌『ホトトギス』の発行・編集人で、晩年は子規の研究と顕彰に身を捧げた。極堂の父は今治市出身で、春秋のお彼岸には父の生家・大日方家の菩提寺を訪ねる機会があった。

瀬戸渦の とけては奈可れ(流れ)

春の潮

八十四翁 極堂

この句碑(石英片岩)を建立した「極堂会」は、昭和32(1957)年春に発足。会の目的は、極堂の事績顕彰・志の継承・愚陀仏庵の建設など。当時、今治市内に極堂の句碑が一つもなかったことから、村瀬虹雨楼・片山泗水らの「今治極堂会」が同39年11月に建立した。

⑥ 中渡島潮流信号所の腕木式信号機

来島海峡の近代航路整備は明治30年代に図られ、同33(1900)年4月20日に中渡島灯台、同35年4月1日に大浜灯台とコノ瀬灯標が初点灯する。中渡島灯台では、明治42(1909)年8月15日から潮流腕木式信号機などの運用を開始し、名称を中渡島潮流信号所に変更。平成24(2012)年3月26日まで業務を続け、現在は中渡島灯台の名称に復している。同灯台のある中水道は、1000ノット(時速約18.5km)の急潮流と直径10m以上の渦潮が発生する海域でも知られる。

これは初代の信号機で、平成2年まで使用。赤丸と黒四角の形象板の傾斜角度で北流・南流を表示し、同海峡の「順中逆西航法」の助けとなった。

⑦ カーブ 駅のJR波止浜駅

糸山公園最寄りの鉄道駅。

大正13(1924)年12月1日の開業当時、波止浜は全国有数の塩田産地だったことで、塩田内に駅舎や路線を設けることを町が拒絶。このため郊外に駅がつくられ、ホームがカーブする奇妙な設計になったという。

